



# 地域への責任を自覚し 世界に発信する 教育・研究拠点をめざして

## 学長あいさつ

Message from the President

「選択」と「集中」という言葉があります。とくに地方国立大学に向けられたこの言葉の意義を、私は学長職3年目を迎え、つよく認識するようになりました。もちろん大学はその存在を謳うかぎり、規模の如何を問わず、教育研究活動が多様性と普遍性をもち、また世界水準をめざすものです。これを前提にしながらも、私は本学が以下の二点において独自性を発揮すべきだと考えます。

一つは、本学がこれまでに増して地域に根ざし、地域に必要とされることです。教育文化、医学、工学資源の三学部からなる秋田大学は、これまでも全国有数の高い学力水準を支える教師教育と地域医療、それに地場産業の振興など、地域の存続発展に不可欠の役割を担ってきました。私はこのような役割を、もはや自己を高みに置いた「貢献」の域ではなく、いわば地域への「奉仕」ととらえています。昨年8月に立ち上げた「秋田大学横手分校」は、そうした意図の一端を示すものです。また当該分校活動の一つである本学学生の特産食品づくりの支援などは、とかく仮想現実性に浸りがちな若者たちに社会現実への感性を育て、豊かな地域資源から未来に生きる術(すべ)を学びとってほしいという願望に結びついています。

他の一つは建学以来の伝統を強力に賦活しようということです。つまり、世界的な資源需要の高まりや資源再利用の動静に本学独自の知的活動をもって応えようと思います。その見地から本学は秋田鉱山専門学校以来培ってきた資源学の教育研究を組織的にも拡充させつつあります。昨年10月設立された全学組織「国際資源学教育研究センター」は、単に国内の資源教育と研究の拠点としてではなく、アジア、アフリカ等の新興資源国からも期待される人材養成の機関となるためのものです。留学生たちは陸続と参集しています。

秋田大学は今、内と外に向けて役割を発信しつつあります。このことを通して、本学は北東北の基幹的な大学としてのみならず、世界にその存在を示してまいります。

国立大学法人秋田大学長 吉村 昇